李白

年　組　氏名（　　）

天の原ふりさけ見れば春日なる
　三笠の山に出でし月かも

この歌は阿部仲麻呂の歌である。仲麻呂は奈良時代の文学者。七一七年遣唐留学生として唐にわたり、唐朝に仕え、玄宗皇帝の下で役人となり、晁衡と名のり、重んじられた。その時李白と知り合った。仲麻呂は一度日本に帰国しようと船出したが、嵐にあって、安南（今のベトナム）に漂着した。しかし、李白はこの時、仲麻呂は死んだという知らせを受け、次のような詩を作った。

晁卿衡を哭す（卿は官名）　李白

日本の晁卿　帝都を辞し、
征帆一片　蓬壺を遶る
明月帰らず　碧海に沈み
白雲愁色　蒼梧に満つ

＊　＊　＊

日本の晁どのは、長安の都を去り、遠く旅立つ船に乗り、船の帆の小さなひとひらは、仙人の島のような日本をめぐった。
清らかな月のような晁どのは、青い海にしずんで帰らぬ人となった。白い雲が憂いをおびて、蒼梧（江南の海岸あたり）の海に広がっている。

このように日本人ともかかわりのある李白とは、いったいどのような人物だったのであろうか。

李白は七〇一年、中国本土をはるかにはなれた土地、スヤブ（今のキルギスタン共和国のトクマク）で生まれた。父は裕福な商人であった。李白が五歳の時、一家は蜀、現在の四川省綿陽県に移った。李白は子供のころから文学書に親しみ、十代から詩をつくった。十代後半になると、奔放で自由を愛する李白は、剣術を学び、仁侠の徒と交わったり、仙人世界にあこがれ、隠者や道士と交わったりした。
二五歳になった李白は、故郷の蜀をはなれ、旅に出た。

○黄鶴楼の伝説○

昔、長江のほとりに一軒の居酒屋があった。一人の道士がたびたび酒を飲みにきたが、酒屋のおやじは酒代をとらずいつもサービスしていた。ある時、道士はお礼にといって、ミカンの皮でかべに黄色いつる（黄鶴）の絵を書き「これがお礼だよ。客が来たら手をたたきなさい。このつるが舞い出て酒を運んでくるから。」と言って立ち去った。さっそく手をたたいてみると、黄色いつるが、かべからぬけ出てきて、舞いながら酒をいくらでも運んでくる。それからというものは、千客万来、居酒屋はみるみる大金もちになった。
十年ほどして、また道士が店に来た。そして、酒を飲んだあと、ふえを取り出してふくと、天からは白雲が飛来し、かべからは黄色いつるがぬけ出てきた。道士はそのつるの背に乗り、白雲とともにはるか天上へと飛び去っていった。
後の世の人が、そのつるをしのんで、この地に黄鶴楼を建てたという。

早に白帝城を発す　李白

朝に辞す　白帝　彩雲の間
千里の江陵　一日にして還る
両岸の猿声　啼いて住まざるに
軽舟已に過ぐ　万重の山

早朝、朝焼け雲のたなびく白帝城に別れを告げて、千里もはなれた江陵の地に、たった一日で帰っていく。
途中、両岸の猿の鳴き声がたえまなく続くのを聞くうちに、小ぶねは、いく重にも重なった山々の間を通り過ぎていた。

そして、七二七年結婚、七二八年には隠者詩人孟浩然と知り合う。孟浩然は、李白より一二歳年上で、李白が最も親しく交わり、尊敬した人物の一人であった。それだけに、教科書にものっている有名な「黄鶴楼にて孟浩然の江陵に之くを送る」の詩には、いうにいわれぬさみしい思いが、「孤」「遠」「天際」などの言葉で表されている。
その後、李白は、大望である天子を補佐して天下を救うことも、文学をもって後世に名を残すこともできず、不遇の年月を送った。しかし、七四二年、推挙する人があり、李白は、宮廷詩人として活躍する場を得た。それから足かけ三年、李白は絶頂期にあったが、彼の名声をねたむ者により中傷され、追放された。仲麻呂と知り合ったのは、この宮廷詩人時代であり、仲麻呂の海難を知ったのは、七五三年、追放後のことであったので、仲麻呂が再び長安にもどり、唐朝に仕えたことは最後まで知らなかったらしい。
この後、李白は杜甫と出会って、一年ほどいっしょに行動したり、賊軍の徒として流刑にあうなどしながら、各地を遍歴し、七六二年十一月、六二歳でなくなった。

李白

李白は酒豪として知られ、伝説によるとよっぱらって、水中の月をとらえようとしておぼれ死んだといわれる。
そのためか、李白の詩の中には酒の詩が多く、有名な詩に「山中に幽人と対酌す」とか「客中に作る」などがある。また「春夜桃李の園に宴するの序」の名文もある。この文章の冒頭文は、芭蕉の「おくのほそ道」にも引用された「夫れ天地は万物の逆旅にして光陰は百代の過客なり」である。
また、彼の詩には数字がよく用いられ、比喩としても効果をあげている。例えば、

「白髪三千丈　愁いに縁ってかくの似く長し」
『秋浦の歌』
「飛流直下三千尺　疑うらくは是れ銀河の九天より落つるかと」
『廬山の瀑布を望む』
「三百六十日　日々酔うて泥の如し」
『内（妻のこと）に贈る』

などがある。